

「第45回シナリオS1グランプリ」

部門：①

題名：「誰よりも、高く跳べ」

名前：Parade556

○ あらすじ

加賀大彌（十一）は、スポーツ強豪大・清王大学・陸上部総監督。現役時代、成し遂げることができなかつた五輪の走り幅跳びで、

「世界記録を塗り替えて金メダルをとる」

その目標を叶えるために、後進の指導をしている。そしてそれは、元走り幅跳びの選手で、加賀を幼少期から厳しく指導してきた父親・幸太郎の悲願でもあつた。加賀は、大学の遺伝子研究者・小倉丈（三十七）と組み、有望な高校生の運動系遺伝子を無断で調べていることがマスコミにバレ、加賀だけが大学を辞めることに。

妹のうらら（三十九）から、廃校をリノベーションしたフリースクールで一緒に働かないかと誘われ、加賀は断るが、強引に押し切られて行くことに。すると待ち合わせの駅前で、万引きをして逃げてきた氷室凱（二十一）と出会う。フォームは滅茶苦茶だが足が速く、加賀は凱の才能にほれ込む。

うららから、凱がフリースクールに通う生徒だと知るが、凱の母親・結（31）は、悪さばかりする息子を罵倒する。加賀が、「凱を自分が育てる」というと「金さえ払えばやる」という始末。

凱は、また万引きをして今度はビルの屋上に逃げ、落下しそうなところを何とか加賀に救い出される。結は限界になり、凱を施設に預けるとうららに伝える。

加賀とうららは、幸太郎の墓参りに。幸太郎は、2年前に亡くなっており、加賀は、現役最後の試合で怪我をした時に確執を起こし、それから一度も幸太郎とは会っていなかった。

結の働くキャバクラで火災が起こり、結が取り残される中、凱は、母親がいる炎の中に飛び込んでいく。加賀は凱を連れ戻そうと炎の中に飛び込もうとしたところを駆け付けた消防隊員に止められる。

結は亡くなり、凱は生き残った。加賀は、歩けなくなった凱を守る決意を固める。

登場人物表

加賀 大彌 (41) (11) (22) (27)

大学の陸上部監督

加賀 幸太朗 (64) (35) (46) (51)

大彌の父

加賀 うらら (39) (9) (37)

加賀の妹

氷室 凱 (11) (4) 小学生

氷室 結 (29) (22) 凱の母親

小倉 丈 (37) 遺伝子研究者

白石 涼 (21) 陸上選手

新座 一郎太 (62) 大学の理事長

五輪の実況アナウンス

五輪の解説者

フリースクールの生徒・児童たち

その他 コンビニ店員

警察官

消防士

看護師

○北京五輪・陸上競技場（走り幅跳び）

T・「北京五輪 走り幅跳び 決勝」

実況（声）「さあ、24年振り、日本人二人目のメダル獲得なるか加賀大彌」

加賀大彌（27）、スタートで構える。

解説者（声）「追い風1m。グラウンドコンディションも良いです。ラスト6本目、期待できますよ」

○同・スタンド

加賀幸太朗（51）、加賀を見ている。

実況（声）「スタンドでは、24年前、ロス五輪で銅メダルを獲得したお父さんの幸太朗さんが見守っています」

解説者（声）「ここまで、幸太朗さんと二人三脚で闘ってきましたからね。何とかメダルを獲ってほしいですね」

○同・陸上競技場

加賀、助走をつけて走りだす。

実況（声）「加賀。スタート」

解説（声）「良いスタートだ」

加賀、ぐんぐんスピードを上げていく。

しかし踏切板の直前で、

加賀「あっ」

加賀、バランスを崩して倒れてしまう。

実況（声）「あーっと転倒。転倒です」

加賀、左膝をおさえて苦悶の表情。

○病院・ベッド

加賀、膝の手術を終え、ベッドで寝ている。

幸太朗、入室。

加賀「…父さん」

幸太朗「（何かを言おうと口を開く）」

○加賀の所属する大学・全景

T・「15年後」

正門に掲げられた【清王大学】の看板。

広大な敷地。スポーツ系の大学。

加賀の声「今、俺は大学で陸上部の総監督をしている」

○同・陸上競技場（走り幅跳び場）

加賀大彌（ヤニ）、スタートで構える。
ハーフパンツから覗く左膝に手術痕。
視線を砂場にやる。ドラゴンボールのスカウターのように、視界に世界記録8m95のラインが見える。

*以降、距離を測るシーンでは、この能力を發揮（目視で距離がわかる）

加賀の声「引退して15年が経っても、俺には、あのラインが見える」

加賀、現役さながらのスタートで飛び出すとぐんぐん加速し、踏切板を蹴って大きくジャンプ。

空中で見事なダブルシザースの体勢になり、7m50センチに着地。

加賀、自分の記録にがっかりとした顔。砂場の傍で、緊張した顔で見る男子選

手たち。その中に、白石涼（21）。

加賀、気を取り直して選手たちを見て、

加賀「踏切直前の歩幅な」

選手たち「はい」

加賀「大きく、小さくだ。いいな」

選手たち「はい」

○同・陸上競技場のエントランス

シヨーケース内、加賀が清王大学時代に獲得した幅跳びの国内外の金メダル、

【アジア記録8m54】の賞状が並ぶ。

写真、加賀（22）の隣には、必ず幸太郎（46）が立っている。今の加賀と同じジャージを着ている（元総監督）。

加賀の監督時代（ここ15年）のものもあるが、大学時代のトロフィーの方が目立つ場所にある。

○同・陸上競技場（走り幅跳び場）

加賀「白石、やってみろ」

白石「は、はい」

× × ×

白石、スタートで構える。

加賀、砂場の傍で腕組みして見ている。

白石、緊張した顔。

白石、スタートして加速。加賀よりも

速い。しかし踏切板をうまく蹴れず、

空中の体勢も悪いまま、加賀よりも手

前で着地。

加賀、腕組みしたまま白石を見ている。

白石、恐る恐る振り返る。

加賀「何故できない？」

白石「すみません」

加賀「今、俺がやっただろ。その通りやれば

いいんだ。簡単だろ？」

白石「はい。すみません」

加賀「いいか、五輪の金メダリストの平均は、

24、3才だ。これから5年間が勝負なん

だ」

白石「はい」

加賀「一分、一秒も無駄にできないんだぞ」

白石「はい」

加賀「お前ら全員だ」

他の選手たち「はい」

白衣を着た小倉丈（37）が現れる。

小倉「総監督」

加賀「時間か？」

小倉「お願いします」

加賀「全員、踏切30本やっつけ」

白石「はい」

加賀、小倉と一緒に去っていく。

ホッと息を吐く白石や選手たち。

加賀が見えなくなると、白石の周りに集まりなぐさめる他の選手たち。

○同・研究棟内の会議室

様々な高校の制服を着た少年・少女たちが座っている。

小倉「これから抗体の検査を行います。では、口の中に検査棒を入れてください」

口内に検査棒を入れ粘膜をとる選手達。

加賀、その光景を見ている。

加賀の声「抗体検査なんて、ウソだった。俺たちには、別の目的があった。そう、遺伝子の検査。陸上向きの遺伝子をもっているかどうかを知りたかった」

○同・研究室

T・「一週間後」

加賀、小倉と選手たちの遺伝子検査結果のシートを見ている。運動能力に関係するとされる遺伝子の一覧が記載されている。ACTN3、IL15、CNTF、FST、IGF2など計11種類。5段階評価でトータルスコアが書かれている(最高55点)

小倉「うーん。今年は不作ですね」

加賀「どいつもACTNが弱いな」

小倉「これじゃあ短距離は無理ですね」

加賀「まあ、この二人くらいか」

小倉「400ですかね？」

加賀「ハードルでもいいかもな」

小倉「白石ほどの選手は、なかなか出てきませんね。52点ですよ。幅跳びも短距離もできるなんてカールルイスみたいだ」

加賀「アイツは…ぜんぜんダメだ。俺の言っていることが何もできない」

○同・陸上競技場

白石、ひとり踏切の練習。加賀がいな
いと見事な踏切でジャンプを決める。
8mのラインを越えている。

○同・研究室

小倉「さすがに、加賀さんと比べるのは」
加賀「アイツには、決定的に欠けているものがある」

○（回想）清王大学・陸上競技場

加賀大彌（二二）、汗みずく。

加賀幸太郎（35）、清王大学のジャー
ジを着て、砂場の横に立っている。

幸太郎「大彌。もう30本目だぞ」

加賀「大丈夫。次は、次はクリアするから」

幸太郎「オマエじゃ無理だ。諦める」

加賀、スタートで構える。

幸太郎「まったたく」

加賀、走る。踏切板をジャンプして着

地。7m超え。

幸太郎、距離を測ると笑顔になり、

幸太郎「よしっ。7m、クリアだ」

加賀「やった」

幸太郎、砂場の奥まで歩いていくと、

立ち止まる。

幸太郎「よく覚えておけ。世界記録は、ココ

だ。8m95センチ」

加賀「うん」

幸太郎「五輪で、世界記録を塗り替えて金メ

ダルをとるぞ」

加賀「うん」

幸太朗「目標は、16年後の北京だ」

加賀「うん」

幸太朗「誰よりも、高く跳べ。誰よりもだ」

加賀「うん」

加賀（今）の声「オヤジが笑うのは、俺が目標をクリアした時だけだった。俺は、メダルも世界記録もどうでもよかった。その笑顔だけが見たくて、いつも必死で飛んだ」

○元の研究室

加賀「アイツには、何としてでも目標を達成しようという気持ちが足りない」

小倉「加賀さんほどのスコアで、目標にむかってフォーカスできる人間のことを、人は天才って言うんです」

加賀「…」

小倉「スコアが54点なんて、ありえないですよ。短距離に専念してたら」

加賀「（遮って）オヤジが許さないよ」

小倉「ですわね」

加賀「…一瞬もないよ。幅跳びを選んで後悔したことは」

小倉「指導者になってもそうですもんね」

加賀「よく理事長に怒られてるよ」

小倉「やっぱ100ですから。陸上は」

加賀「白石を、100に専念させたいそうだ」

○大学・キャンパス内のメインストリート

加賀、思案顔で歩いている。

中年の女性が、先日、検査を受けていた少年を連れてやってくる。

女性「総監督」

加賀「ああ、どうも」

女性「ウチの息子、どうでしたでしょうか」

加賀「ええ」

女性「是非、監督の手でオリンピック選手に育ててください」

加賀「私の一存で決めるわけじゃありませんので、大学からの回答、お待ちください」

女性「どうぞよろしく願います」

加賀、頭を下げた立ち去る。ずっと頭を下げている女性と少年。物陰から見ていた他の親子も加賀のところへ。加賀、苦笑しながら話を聞いている。

○同・理事長室

新座一郎太（の2）電話で話している。

新座「まずいな…これは」

新座、テーブルの上に広げた週刊誌に、

【遺伝子検査により、入学を決定？優生学の疑い】の見出し。

電話の相手「理事長。ご決断を」

新座「しかし…加賀がいないと」

電話の相手「このままじゃ、ファンドにも影響が出てしまいます」

同じ週刊誌の見出しに、文科省が10兆円の支援金を設定した国際的な競争力を求める大学ファンドの記事が。

電話の相手「理事長」

× × ×

新座の目の前に、加賀。

加賀「私の何が間違っていますか？」

新座「加賀」

加賀「検査は、勝つための必要条件です」

新座「しかしな」

加賀「隠していることにも違和感がありました。

理事長。コレを機会に公表しては……」

新座「（遮り）バカなことを言うな」

加賀「理事長。我々の目的は……」

新座「（遮って）加賀、すまん。この通りだ。

大学を辞めてくれ」

加賀「本気ですか？我々の手で、オリンピッ

クのメダリストを作るって決めたじゃない

ですか。理事長、理事長」

部屋の中に、大学のネームプレートを

下げた職員たちが雪崩れ込んできて、

加賀を抑えつける。

○同・陸上競技場のエントランス

T・「三日後」

職員たちが、ショーケース内にある加賀のメダルや賞状を取り出していく。

○同・陸上競技場

小倉が、白石たちと話している。

○公園

加賀、苛立った顔でスマホを見ている。
ニュースに、加賀の見出しが並ぶ。

【加賀総監督を解雇 遺伝子検査は総監督の主導か】

【理事長 謝罪。行きすぎた優生学】

【加賀総監督 選手へのハラスメント
疑惑も!!】

加賀「何が優生学だ。クソっ」

着信。画面に【妹・うらら】。

うららの声「もしもし。お兄ちゃん？」

○廃校をリノベーションしたフリースクール

(うらが園)・教員室

加賀うらら（39）、スマホで電話。

加賀の声「なんだよ」

うらら「今、暇っしょ？」

加賀の声「暇じゃない」

うらら「大学、クビになったじゃん」

加賀の声「バカ。俺から辞めたんだ」

うらら「物はいいいよね。次の仕事ないんで

しょ？」

加賀の声「あるよ」

うらら「昔っからウソつくの下手ねえ」

加賀の声「切るぞ」

うらら「手伝ってよ。私の仕事」

加賀の声「バカか」

うらら「前話したよね？廃校をリノベしたフ

リースクール。私のいるNPO法人が運営

してるって話」

加賀の声「憶えてない」

うらら「じゃあ今話した。ちよっとだけでい

いから来て。今、人、いないのよ」

加賀の声「やるわけないだろ。そんなモン」

うらら 「そんなモンって何よ」

加賀の声 「まともに学校も行かないような甘
ったれたガキの相手なんかするか」

うらら 「そういうレッテルを貼る連中と闘っ
てるのよ。あなたの妹は。日夜」

加賀の声 「だから婚期逃すんだよ」

うらら 「そっくりそのまま返すわ」

加賀の声 「男と女は違う」

うらら 「今の時代によくそんなこと言えるね」

小学校低学年くらいの子供たちが部屋
になだれ込んでくる。

児童A 「うららせんせー。あそぼー」

児童B 「あそぼーよー」

うらら 「ちよ、ちよっと待ってね。じゃあ、
じゃあ、父さん。父さんに会いに来てよ」

○公園

加賀 「会いに来てっておまえ…」

うららの声 「ね。ね」

視線の先、幼い子どもに自転車を教え

ている父親がいる。

子どもが上手くできない。ずっと笑顔でいる父親。とても幸せそうな顔。

加賀「オヤジは、そんなこと望んでないよ」

○（回想）陸上競技場からの帰り道（夕方）

加賀と幸太朗、歩いている。

幸太朗「何故、できないんだ。情けない」

加賀「ご、ごめんなさい」

幸太朗「オマエなんか、北京で金メダルがとれるわけがない」

加賀「…と、父さん」

幸太朗「オマエなんか、俺の子じゃない」

幸太朗、先に歩いていく。

加賀、必死で追いかけていく。

○（回想）加賀の家・庭（夜）

窓に映る食事をする幸太朗と家族たち。

加賀、ひとりスクワットをしている。

家の中から笑い声が聞こえてくる。

加賀、涙が出るも、腕でゴシゴシと拭き、歯を食い縛ってスクワット。

○元の公園

自転車練習の幼児が転び、泣き出す。

中年男性が駆け寄って抱き上げる。

加賀「何故だ？失敗したのに」

うららの声「何の話？」

加賀「いや、なんでもない」

○フリースクール・教員室

うらら「だって父さんは、もう…ちよつと、

今、話してるから。待ってって」

児童A・B「うららせんせー。あそぼーよー」

うらら「じゃ、そういうことで」

うらら、電話を切る。

○うららの働くフリースクールのある駅前

T・「二日後」

寂れた駅前商店街。

加賀、帽子とサングラスをしている。

加賀「なんで俺が：こんなところに」

加賀、スマホでうららに電話。

加賀「なんで迎えに来てないんだよアイツは」

○フリースクール・教員

うららの携帯がバイブレーション。

児童Aの声「また、いなくなったの？凱くん」

バタバタと走り回るいくつもの音。

○駅前

加賀、スマホニュースを見ている。

白石が、日本選手権の短距離100m

予選で9秒台をマーク。白石のコメント

ト「今は、陸上楽しい」

加賀「アイツ：俺がいなくなった途端に」

加賀、長閑な町並みを見渡して、

加賀「クソっ。俺はなんでこんなところに。

クソっ：クソっ」

男の声「ドロボーだ。誰か捕まえてくれ」

○ 駅前の商店街

氷室 凱（二）、人波をよけて走っている。不恰好なフォームながら信じられないほどのスピード。

コンビニ店員「待て、こらあ」

店員の青年もかなり速いが、凱に追いつけない。

凱、加賀のほうに向かって走ってくる。

加賀「ひでえフォーム」

加賀、だんだん近づいてくる凱に驚く。

加賀「マジか。はええ」

凱、駅前までくると方向転換し、川沿いのフェンスに沿って走りだす。

加賀、咄嗟に追いかける。

凱、追いかけてくる足音に気づき、スピードをあげる。

加賀、凱の服を掴みかめたところで、凱、ぐいんと加速する。

加賀「お」

加賀、加速しようとして左膝がガクン

となる。

加賀「うわっ。いてえ」

加賀、膝を押さえて倒れ込む。

加賀、左膝を抱えながら顔を上げると、

凱、フェンスの破けたところから、6

m50センチある反対側までジャンプ。

ダブルシザースで見事に着地。

加賀、目を見開く。

凱、そのまま逃げていく。

コンビニ店員、追うのを諦める。

コンビニ店員「あのヤロー。またやられた」

うらら「お兄ちゃん」

加賀「うらら」

コンビニ店員「あ、うらら先生。またアイツ

にやられたよ。いいかげんなんとかしてよ」

うらら「え？また」

加賀「うらら。オマエ、知ってんのか？アイ

ツのこと」

○フリースクール・教員室

加賀とうらら、並んで座っている。

入口には鈴なりの生徒たち。小学生低

学年（児童と表記）から、高校生（生

徒と表記）くらいまでいる。

うらら「あの子は、ウチに来てる子なの」

加賀「なんだ。失敗作か」

うらら「なんてこと言うの」

加賀「アイツ、いくつだ？」

うらら「小5。11歳」

加賀「11だって？」

○（回想）駅前を通り

6m50の川をジャンプする凱の姿。

○元の場所

加賀「よし、イケる。イケるぞ」

生徒A「うらら先生」

うらら「どうしたのみんな？」

生徒A「また凱？」

うらら「うん」

生徒B 「もう、アイツ出禁でいいよ」

子どもたち、「出禁」の大合唱。

うらら 「ダメ」

生徒A 「でもさあ」

うらら 「ここは誰でも来ていいとこなの」

子供たち、大人しくなる。

加賀 「今、あのガキ、どこいんだ」

うらら 「わかってたら、こんなことになって
ないから」

教員室の電話が鳴る。

うらら 「もしもし。え？はい。わかりました。

すぐ行きます」

うらら、部屋を飛び出していく。

加賀 「おい。見つかったのか」

加賀、勢いこんで立ち上がるも膝の痛
みに倒れる。

加賀 「うわっ、いてえ」

加賀、顔を上げると子ども達。

児童A 「新しい先生？」

生徒A 「俺、その人知ってる。優生学の人」

児童B「ゆーせー学って何？」

生徒A「遺伝子で子供を選んだ。それがばれて、クビになったんだろ？」

加賀「何が悪い？オリンピックク選手を育てるのが俺の仕事なんだ。どこにでもいる子供

でいいわけじゃない。オマエらみたいなの……」

生徒A「俺らみたいなの、なんだよ」

児童A「この人、悪い人なの？」

生徒A「そう。俺らとは絶対に遊んでくれな

い人だよ」

児童B「えーこわい」

生徒A「いこう。みんな」

子供たち、いなくなっていく。

加賀「チッ」

加賀、スマホで電話。

○大学・研究室

小倉、電話に出る。

小倉「マズいですって。今は」

加賀の声「すげえの見た」

○同・陸上競技場

白石や選手たち、練習している。

グラウンドは和やかな雰囲気。

小倉の声「何言ってるんですか」

加賀の声「フォームが滅茶苦茶なのに、すげ

えスピードなんだ」

小倉の声「…加賀さん」

加賀の声「絶対に才能がある」

小倉の声「加賀さん。いや、すごいな、この

状況で」

加賀の声「頼むよ。検査してくれ」

小倉の声「すいません。大学から、加賀さん

とは絶対に関わるなと」

加賀の声「ふざけんな。これまでの恩忘れた

のかオマエはッ」

小倉の声「勘弁してください」

加賀の声「みすみす才能を逃しているのかよ。

俺たちの手で…」

○フリースクール・教員室

加賀、電話を見て、

加賀「あ、切りやがったあのヤロー」

児童が一人残っている。

児童A「なんか楽しそう」

加賀「楽しいよ。最高だよ」

児童A「悪人のくせに」

加賀「俺の手でレコードホルダーが作れんなら、悪魔でもなんでもなつてやるよ」

児童A「ひとりで喋ってる。うえ」

加賀「ちくしょう。俺以外の誰が育てられるってんだ。世間なんて気にしやがって。バ

カヤロー」

児童A「汚い言葉。め」

加賀「ちくしょう。俺はなんでこんなところに
いなくちやいけねんだよ。ちくしょう。

ちくしょう」

○同・校庭（夕方）

うららの運転する車が停まる。

助手席に凱。

凱、助手席のドアを開け、動きにくそうに出てくる。うららも引っ張られるようにして助手席へ。
うらら、自身と凱の体を縄跳びと縄跳びでつないで縛っている。

凱「マジなんなのコレ」

うらら「ダメ」

凱「いや、勘弁してよ。うららちゃん」

うらら「うらら先生」

うらら、助手席から凱につづいて出てくると、子ども達が集まってくる。

うらら「みんな、ただいま」

生徒A「オマエのせいで、こっちまで万引きしてるって思われてんだよ」

生徒B「なんでそんなことすんだよ」

凱「スリルだよ」

生徒A「バカじゃねえの。最悪だよオマエ」

生徒B「マジ最悪」

児童たち「最悪う」

子ども達からブーイング。

うらら「待って。みんな」

加賀、遅れて出てくる。

うらら「凱くんは、私が何とかするから」

凱「ふん」

うらら「だからみんな、凱くんのこと嫌いに
ならないで」

生徒A「それは無理だよ」

うらら「どうして？」

生徒B「もうみんな、大嫌いだし」

凱、子ども達にむかって唾を吐く。子
どもたちから悲鳴があがる。

うらら「バカっ」

凱、うららに引っ張られてつんのめる。

凱「ぐえ。何すんだよッ」

校庭に軽自動車が入ってくる。

凱「ゲッ、母ちゃん」

氷室結（29）、運転席から降りてくる

と凱のところに来て、頭を殴る。凱、
するつとよけるが、結も慣れた感じで

腹に膝蹴りを入れる。

凱「いてえ」

結「マジおまえ最悪。死ねよ」

凱「へへへ」

結「何回、万引きしてんだよ」

凱「スリルだよーん」

結「殺してやる」

結、凱を組み伏せる。怒髪天の結とは

対照的に、凱はヘラヘラしている。

うらら「結ちゃん待って」

結「マジでこんな奴いららないから。マジで消

えろ。存在が迷惑なんだよオマエ」

凱「殺せ殺せえ」

結「てめえ。なめんじゃねえよ」

加賀「いららないなら、俺にくれよ」

結、殴る手を止めて加賀を見る。

結「誰？おっさん」

うらら「ごめん。私の兄」

加賀「いらないんだろ。じゃあ俺にくれ」

結「ぜんぜん良いけど、最悪だよ。コイツ」

加賀、凱のところまで行くと、髪の毛

を引っこ抜く。

凱「いてえ。何すんだよ」

加賀「コイツには可能性がある」

結「は？何の？あるわけないじゃん。ゴミだしクズだし」

うらら「結ちゃん」

結「うららちゃんにはわかんないんだよ。自分の子供だったら何でも可愛いなんてただの幻想だから。こんな奴、マジでただの他人。無理、生理的に」

凱「へへ」

うらら「結ちゃん…」

加賀「俺が金メダリストにしてやる」

結「は？頭狂ってんのオッサン。こんな奴、人生のほとんどが刑務所か、誰かに恨まれて殺されるかのどっちかだから」

凱「殺される？ふざけんなよ」

加賀「俺とくれば、人生変わるぞ」

凱「誰がオッサンなんかと」

結「やるのは良いよ。でもタダじゃやんない」

加賀「は？」

結「わかんたろ。金だよ。金」

うらら「結ちゃん。モノじゃないのよ」

加賀「いくら？」

うらら「お兄ちゃん」

結「とりあえず20万」

加賀「20万でいいんだな」

うらら「二人ともやめて」

結「とりあえずだから」

加賀「わかったよ」

うらら「そんなの絶対認めません」

○大学・研究室（夜）

小倉、困惑顔。

小倉「無理なんですよ」

加賀の声「調べるだけでいいんだ」

小倉「研究所、閉鎖することになったんです」

加賀「なんで？」

小倉「なんでって…つまり…人類はみな平等

ってことですよ」

加賀「ふざけんな」

小倉「そろそろ、我々も建前の中で生きないと。ね、加賀さん」

加賀「閉鎖でも何でもいいから、最後にやれ」

小倉「…マジですか」

○同

T・「二日後」

小倉、検査結果を見て驚いた顔。震える手で加賀に電話をかける。

○フリースクール・教員室

加賀、子供達に絡まれている。

児童A「走るのおしえてえ」

児童B「リレーの選手になりたいの」

加賀、小倉からの電話に出る。

加賀「遅いよオマエ。結果、出たのか？」

小倉の声「だ、誰なんですか？」

子供たちが騒ぐため、聞こえづらい。

加賀「え？何？なんだって」

○大学・研究室

小倉、凱のスコアシートを見る。

小倉「満点です」

○フリースクール・教員室

加賀、子供達を振り落とし立ち上がる。

加賀「何だって」

小倉の声「今、何歳ですか？」

加賀「11歳」

小倉の声「この子がちゃんとやったら、10

0のファイナリストも夢じゃないですよ」

加賀「バカ。幅跳びに決まってるだろ」

小倉の声「加賀さんッ」

加賀、電話を切ると部屋を飛び出す。

○同・廊下

加賀「うらら、うらら」

うらら、教室から出てくる。

うらら「犬じゃないんだから」

加賀「アイツ、どこ行った」

うらら「アイツじゃない。凱くん」

加賀「ちゃんと捕まえとけよ」

うららのスマホが鳴る。

うらら「もしもし。え？え？ウソでしょ」

○駅前のオフィスビルの非常階段

T・「今から30分前」

凱、ビルの非常階段登っていく。片手には菓子パン。

追いかける警察官A・B。

警察官A「待て。待て」

○同・屋上

凱、屋上のフェンスを越えて、屋上の1mもない淵の上に立つ。

警察官A「危ないから戻れ」

警察官B「わかったから、戻れ」

凱「やーだ、よー」

凱、フラフラと歩いていく。

× × ×

ビルの下には野次馬が集まっている。その中に、キャバ嬢の衣装を着た結。

凱、結を見つける。目が合う。結、人込みに隠れる。

凱、中空にパンを投げると片足をあげて中国雑技団のようなアクロバティツクな真似をする。

野次馬から悲鳴。

加賀とうらら、屋上に来る。

加賀「何やってんだオマエは」

うらら「凱くん。戻ってきて」

凱「やーだよ」

うらら「なんでこんなことばかりなの」

凱「別に。スリルだよ」

加賀「バカヤロー。戻ってこい」

凱「捕まえてみるよ」

加賀「よーし」

警察官A「あ、ちよつと」

加賀、警察官の静止を振り切り、フェンスを乗り越えようと凱のところへ。

加賀、階下を見る。

警察官が防護マットを敷いている。

加賀「マジか」

凱、ビルの端ギリギリを歩いている。

加賀「戻ってこい」

凱「やーだよ」

凱、ビルの端を歩いていき、隣のビル
(1m50センチ)にジャンプ。

野次馬から悲鳴。

加賀「バカヤロー」

加賀も追いかけていき、ジャンプ。

加賀、ビルのフェンスを掴みながら追
いかけていく。

凱は、何も掴まずスルスルと歩く。

強風。

加賀、思わずしやがみ込む。

凱、風にあおられてバランスを崩し、
下に落ちかけるも、何とか戻る。

凱「ふえー。あぶなかった。うえーシビれる
う」

○陸上競技場・走り幅跳び場

白石たち、楽しそうに遊んでいる。

白石、強風の中、走り幅跳びをする。

風に流されてバランスを崩して着地。

5 m程度しか飛べない。

白石「うわっ、無理無理」

○ビルの屋上

加賀「待て。おい」

凱「くんなよ」

ビュンビュンと拭く風。

隣のビルとは、8 m 10センチある。

日本歴代トップ10レベルの距離。し

かもここは競技場ではない。

加賀「待て。やめろ。オマエじゃ無理だ」

凱「キモいんだよ。おっさん」

加賀「待て。やめろ」

凱、強い横風の中、助走をつけて隣の

ビルにジャンプ。風を滑空するかのよ

うに、隣のビルに届く。

加賀「ウ、ウソだろ」

加賀、その姿に思わず見惚れる。

凱、フラフラと歩いていく。

加賀「あ、おい。待て」

加賀、ビルの下を見る。すごい高さ。

○大学・理事長室

新座、加賀のアジア記録(8分54)の

賞状を、寂しそうに眺めている。

○ビルの屋上

加賀「今の俺に…イケるのか。クソっ」

幸太朗の声「大彌。誰よりも、高く跳べ」

加賀、意を決して助走をつけるとジャ

ンプ。横風にまともに押されて左膝を

ビルの外壁に強打するも、片手でなん

とかビルの縁を掴む。

加賀「くっ、くそっ」

加賀、片手で体を持ち上げ、何とか屋

上に転がり込む。

加賀「ぐあっ」

凱「チッ。キモいんだよ。おっさん」

凱、そのまま淵を歩いていく。

隣に、次のビルはない。空き地である。

凱、そのまま歩いていき、空に向かってジャンプする。

加賀、飛び込んでいって凱の腕を掴む。

凱、宙ぶりの状態。

加賀「ばっ、かやるー」

凱「離せよジジィ」

加賀「離すかバカ」

加賀、凱を両手でつかむ。

強風が吹く。

凱の手が滑り落ちていく。

加賀、凱の指先を何とか掴む。

加賀「ぐあ。ぐああああ」

加賀、凱を引っ張り上げる。

○ビルの屋上

凱、加賀やうらら、警察官たちに囲ま

れる中、結が現れる。

結「何やってんのッ。アンタ」

凱「母ちゃんじゃん」

結「なんで、こんなことばかりするのよ」

凱「別に。スリルだよ」

結「もう、勘弁してよ…どうして、母ちゃんのこと苦しめるのよ」

凱「…」

結「いっつも、いっつも…どうしてこんなことばかりするのよ」

うらら「兄さんがいなかったら、凱くん死んでたんだよ。なんであんなことしたの」

凱「別に、なんか、今なら飛べそうな気がしたんだよ。そういうことってあるだろ？」

うらら「ないわバカッ」

加賀、困惑顔の凱を見つめている。

結「もうこれ以上、私の人生、壊さないですよ。お願いよ」

結、その場で泣き崩れる。

○同・1階

ビルから出てくる加賀とうらら。

うらら「とりあえず、良かった。兄さん、怪

我ない」

加賀「ああ。大丈夫だよ」

うらら「そうだ。明日、父さんに会いにか

ない？」

加賀「な、なんだよ急に」

うらら「急にじゃないでしょ」

加賀「別に…あれだろ」

うらら「せっかく傍にいるんだし」

加賀「いや、別に…」

うらら「私も行くから」

加賀「…」

うらら「ていうか、私はこの2年、毎週行っ

てるけどね。正月盆暮れ関係なく」

うらら、加賀を置いて歩いていく。

うらら振り返る。加賀、俯いている。

○墓地・加賀幸太郎の墓前

T・「翌朝」

加賀、緊張した顔で墓石を見つめる。

うらら、傍にある海を見る。家族連れが遊んでいる。

うらら「天気いいなあ。海、気持ちいいだろ
うなあ」

加賀「…」

うらら「なんか、声かけてあげればいいじゃない。初めてきたんだから」

加賀「オヤジは、望んでないだろうな」

うらら「何を」

加賀「こんなトコに来るくらいなら、次を育てろって」

うらら「もうしょーがないじゃない。クビになっただから。クビなんだよ。もう、やれないの」

加賀「俺は、諦めてねえよ。必ず俺の手でうらら「わかった。わかったから。これから
は、もっと父さんの傍にもいてあげて」

加賀「…今の俺に、その価値があるのか？」

うらら「価値？」

○（回想）五輪後、膝を手術したあとの病室

加賀、ベッドの上で幸太朗を見上げる。

加賀「父さん」

幸太朗「俺の人生を返せよ」

加賀「…」

幸太朗「オマエのせいで、全部、パーだ」

幸太朗、そのまま部屋を出ていく。

○元の墓地

加賀「何もできなくなった今の俺に…」

うらら「バカじゃないの。私たち親子でしょ。

親子だから一緒にいるんじゃない。私なん

て父さんに全然相手にされなかったけど、

こうして来てるのよ。何でだと思おう？親子

だからよ。憎いけど、腹たつけど、親子な

の。だから来てるの」

加賀「憎いって…父さんが？」

うらら「マジでバカか」

加賀「怒鳴るなよ。すぐ」

○（回想）加賀の家・リビング（夜）

幸太郎（35）庭で筋トレする加賀（11）
をカーテン越しに眺めている。

加賀うらら（6）、100点のテスト広
げて、

うらら「父さん。見て。うららのこと見て」

幸太郎「うるさい。どっか行け」

幸太郎、瞬きせず加賀を見ている。

○元の墓地

加賀、墓石を見る。すぐに目をそらす。

その手は震えている。

うらら「兄さん。あとは私やっつくから、気
分轉換に散歩でもしたら」

加賀「ああ…うん」

うらら「膝、大丈夫？」

加賀「ああ。大丈夫だ」

加賀、左膝を引きずりながら去る。

うらら、その背中を見送った後、墓石を睨みつける。

うらら「全部、父さんのせいよ。全部」

○海岸

加賀、歩いている。

浜辺では、ビーチバレーをする親子。

遊歩道では、スケボーを教える親子。

加賀、視線を海岸に向ける。世界記録

が目の前に現れる(8m95)。まだく

つきりと、はつきりと見える。

加賀、拳を握りしめるが、力なく緩める。

スマホニュースの通知。二日前、白石が日本選手権で優勝(100m)。白石と新座が握手する写真。

白石のコメント「これからは短距離に専念。夢は五輪のファイナリスト」

加賀「(スマホを見て)ちくしょう。俺は絶対負けねえ」

○墓地

うらら、掃除をしている。

スマホに電話。結から。

うらら「結ちゃん」

結の声「アイツ、施設に入れる」

うらら「そう」

結の声「もう無理なの」

うらら「うん。わかった」

結の声「だって。怖いんだもん。あの子が。

怖いのに

うらら「わかってるから。大丈夫だから」

結の声「私にだって、人生あるもん」

うらら「結ちゃん」

結の声「もう、あの子とは生きたくないの。

限界なの」

電話の向こうで泣き出す結。

○フリースクール・校庭（夕方）

子どもたちを迎えにくる親たち。

うらら、親に挨拶している。

凱、教員室の前の階段に座ってぼんやりしている。

○同・教員室（夕方）

加賀、うららを追いかけてまわしている。

加賀「496、400時間しかないんだ」

うらら「は？」

加賀「仮に85歳まで生きて、8時間睡眠し

た場合の人間が使える時間だよ」

うらら「アタシ、算数苦手だし」

加賀「アイツは、もうすでに64、240時間
間を無駄にしている」

うらら「あ、そう」

加賀「でも、まだ間に合う。アイツの1万時間
間を、俺に取れないか」

うらら「お兄ちゃん。もう決まったの。ウチ
らじゃ、もうどうしようもないの」

車のエンジン音が近づいてくる。

うらら「あ、来た。なんで付いてくるのよ」

加賀、うららについて歩く。

うらら「来ないでいいから」

加賀「ふざけんな。渡してたまるか」

うらら「アホか」

○施設職員の運転する車の後部座席(夜)

加賀とうららの間に凱。

うららのスマホに電話。

うらら「え？ほんとに。え？」

○繁華街・結の働くキャバクラのあるビル

(夜)

ビルが炎に包まれている。多くの野次馬。消防士が忙しなく行きかう。

加賀、うらら、凱、茫然と立ち尽くす。

消防士A「中に一人いる」

消防士B「何階だ」

消防士C「4階。4階」

ビルの外にあるフロアマップ、結の勤めるキャバクラの看板が燃えている。

うらら、傍で茫然と見上げるキャバク

ラのボーイに話しかける。

うらら「結ちゃん。中にいないよね。ね」

ボーイ「いや：休憩室で寝てて。そのまま」

うらら「え？嘘」

凱、それまで見たことのない表情で、

風のような速さでビルの入り口へ。

加賀、凱が横を通り過ぎたところで気

づく。

加賀「待て」

うらら「凱くん」

加賀も追いかける。加賀も、凱を追っ

てビルの中へ入っていく。

○同・4階（夜）

炎に包まれた店内。結が倒れている。

○（回想）駅前を通り

T・「7年前」

氷室凱（ヤ）、泣きながら歩いている。

○（回想）店の前

氷室結（22）、客に品を作る。

結と客、凱を見つける。

客「なんだ。このガキ」

凱「か、母ちゃん」

結の怖い顔。凱、怯える。

客「誰？知り合い」

結「知らない。入って入って」

客「安くしてよ」

結、客の腕をとって店内へ。

凱、立ち尽くす。周囲の奇異なモノを

見る視線。いたたまれなくなって帰っ

ていく。

○元の雑居ビル

結、激しく咳込む。

凱の声「母ちゃん。母ちゃん」

炎の中に凱が現れる。

結「凱」

凱「母ちゃん」

結「凱」

凱「へへ」

結「バ、バカ。バカ」

凱、結に近づいていこうとする。

加賀も追いかけてくる。

加賀「おい。待て。そっちは無理だ」

加賀と凱、結の間に炎に包まれた柱が落ちてくる。両者の間には9m10センチの炎の海が広がっている。世界記

録 (8m54) を大きく超える距離。

結「バカ。何してんだ。バカ」

凱、何の迷いもなく助走をつけると結の方に飛び込んでいく。途中で地面に転がり込むも、そのままゴロゴロと転がって結の所へ。服に火がつく。

凱「あちい。あちいよ」

結「凱。凱」

結、凱の服についた火を払おうとする。

加賀「おい。大丈夫か。おい」

凱「あちいよ。あちい」

結「お願い：助けて。助けて」

加賀、炎の海に臆する。視界の先、世界記録を大きく超えている。

結「お願い」

加賀「：」

結「お願い。助けて」

凱「母ちゃん。あちいよ。あちいよ」

結「この子だけは。この子だけは」

加賀、意を決して助走をつけると走り出した瞬間、

消防士A「危ない」

加賀、消防隊員二人に止められる。

凱と結の辺り、2人の声や姿が消え去るほど一気に燃え上がる。

加賀「待て。奥に人が。人がいるんだッ」

加賀、消防隊員に引っ張り出されてく。

加賀「待て。人が、人がいるんだよ」

○同・外（夜）

うらら、祈るように見ている。

○（回想）集中治療室

幸太朗（94）、今際の際。

うらら（37）、しっかりと幸太朗の手を握る。

幸太朗、何か言いかける。

うらら「何？父さん。何？」

幸太朗「…だ、大彌。大彌」

うらら、悲しそうにうつむく。病室に、加賀の姿はない。

幸太朗「誰よりも、高く跳べ。誰よりも…誰よりも」

幸太朗の目に涙が溢れる。

うらら「…父さん」

ベッドサイドモニターの心拍が止まる。

慌ただしく行きかう看護師たち。

幸太朗の頬を伝い落ちる涙。

○元のビルの前（夜）

うらら、炎に包まれたビルを見上げる。

加賀、消防隊員に引きずり出される。

うらら「兄さんッ」

加賀「まだ中に人がいるんだよ。人が。人が」

○同（朝）

消火された雑居ビル。

○病院のベッド

うらら、座っている。

凱、包帯まみれで寝ているその手を握

りしめている。

加賀、入口の所で立っている。

うらら「結ちゃんが、守ってくれたんだって」

加賀「…」

うらら「最後は、ちゃんとお母さんだったん

だね」

加賀「…」

うらら「でも、凱くん。もう、歩けないかも

って」

加賀「…」

うらら「もう必要ない？兄さんには」

加賀「…」

うらら「大丈夫よ。兄さん、ここにいないくて。

私、いるから」

加賀「ああ」

加賀、部屋を出ていく。

○同・廊下

長い長いリノリウムの床。

加賀歩いている。だんだん早足になり、

今にも走り出しそう勢い。

視線の先に世界記録（8m95）が見え

る。薄ぼんやりとしつつ、見える。

加賀、振り切るように頭を振る。する

とソレが消える。

加賀、振り返る。そして病室に向かっ

て歩き出す。

（了）

2000字原稿用紙換算：110枚